

英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅰ）

—子どもの存在・概念をめぐる—

田中 亨胤

『ことわざ』（大辞典）を基礎資料として、日常の生活世界で何げなく使っている「諺」「格言」に潜在している、「世俗的教育視座」（力みのない含みとしての教育の指針）を可視化することに、本稿としての研究の目的がある。多岐にわたる教育視座を俯瞰しつつ、幼児期の教育・保育の視点から家庭生活における教育視座を把握するものである。この探究過程において、「諺」「格言」には、教育科学としてのぶれない理論仮説が内包されていることも明らかにする。

キーワード：世俗的教育視座、教育理論仮説、持続可能な教育視座、アンビバレンス

Ⅰ はじめに

日常の生活では、さまざまな「諺」「格言」（以下、「ことわざ」として表記）を無意識に使っている。自分の言葉では伝えきれない、語りきれない思いを、「ことわざ」は端的に示的確に表現してくれる。実に便利な言語文化ツールである。理屈抜きに互いに納得してしまう。魔法の言語文化ツールである。「ことわざ」は、その人口に膾炙してきた背景（口承文芸）からの世俗的な言説である。これに対して、「名言」は、著名人なりその専門家である学者、文化人、達人などの世界から醸し出された、他者を感動させ、納得させ、魅了させてしまう、言語文化ツールである。書店にも『〇〇の名言』として平積みでもって陳列されている。

「ことわざ」は、芸術的言語文化ではない。ここに、過去からこれまでの素朴なる長い庶民生活を感じ取る貴重な資料となると考える。この意味で、「ことわざ」は言語文化遺産の宝庫であり、現代に生きる重要な言語文化である。その表現方法においては、「比喩」「誇張」「反語」「掛けことば」など、多様である。個人が主体と

なる文芸言語ではない。「ことわざ」は、短い言語でもって語られるところに、その意味は味わい深いものがある。文字面のみでは、その「ことわざ」の理解には不十分なところがある。受け止める側の、これまでの経験値や想像力に照らして受け止めることも有効である。時代や風土などの背景を重ねることは、「ことわざ」のぶれない読み取りになる。「ことわざ」には、明示されない社会的文脈があるからであろうか。

Ⅱ 研究の目的

(1) 問題の所在

本研究は、『ことわざ』（大辞典）¹⁾を基礎資料として、「ことわざ」に潜在する「世俗的教育視座」を素描するものである。「ことわざ」の言語文化は、必ずしも学術的言語文化ではない。この点から、論理的な訴求力でもって、教育視座を断定的に確定することには、相当なる勇気と難しさがある。さりとて陳腐なることとして脇におくことも否定することもできない。

このような性格を内包している「ことわざ」の意味世界ではあるものの、学術的に解き明かさ

れ、提唱されてきたさまざまな教育理論仮説と共振するところもある。「ことわざ」に潜在する意味世界には、玉虫色の深みがある。

(2) 研究の目的

本研究では、上記の問題の所在をふまえ、次の諸点を明らかにすることを、研究の目的とするものである。一つは、「ことわざ」に潜在している教育視座を可視化することである。二つは、可視化した教育視座を、これまでに学術的に解き明かされ、提唱されてきた教育理論仮説との接点なり関係性を把握することである。これら二つの目的を探究することによって、「ことわざ」は、経験値としての「世俗的教育視座」とどまるものではなく、「持続可能な教育視座」であることも指摘することとする。

なお、「本研究課題（Ⅰ）」の本稿では、副題として示す「子どもの存在・概念をめぐって」に照準を置いて、「ことわざ」を抽出し、論究を試みることを目的とするものである。

Ⅲ 研究の方法

1. 基礎資料

○基礎資料名：「北村孝一・監修『故事俗信ことわざ大辞典』（第二版）、小学館、2012年」を基礎資料。なお、本基礎資料は、1982年に第一版が発行されている。第二版は、第一版を全面的に改訂したものである。

○基礎資料の概要

「基礎資料」は、(株)小学館創立九十周年にあたる2012年に「小学館創立九十周年記念企画」として発行。日本の「ことわざ」、中国に起源を持つ「故事成語」、西洋から入ってきた「ことわざ」、日本各地の「俗信」などを集大成。実際に文献上に現れた使用例を、原則として近世以前に限って掲載。収録項目数は、約43000項目。監

修は、北村孝一氏。編集委員として、佐竹秀雄・武田勝昭・伊藤高雄の三氏が参画。

2. 資料分析条件

本研究課題は、継続研究として設定するものである。そのため、「ことわざ」に潜在する教育視座を、複数の柱を立てて、研究目的に基づいて論究することとする。柱の観点は、「子どもの存在・概念」「環境を通しての教育と育ち」「知的好奇心から生まれる学習意志」「互い関係の中でのコミュニケーションの生成」「家庭生活と親子関係」「生涯発達と育ち・学び」等を想定するものである。それぞれの観点は、個別でありながら、相互に関連し合うものであり、「ことわざ」の重複使用を排除しないこととする。

3. 資料分析手順

○「ことわざ」の抽出：五十音順見出し項目に基づく掲載の43000項目から、本研究の課題に関連する「ことわざ」の抽出（第56集の本稿における抽出項目：こ【子】欄／こだから【子宝】欄／こども【子供】欄／じ【兄】欄／じぎ【兄戯】／すえっこ【末っ子】欄／すてご【捨て子】欄／なく【泣く・鳴く】欄／ななつ【七つ】欄／にくまれご【憎まれ子】欄／ねる【寝る】欄／おさなご【幼子・稚子】欄）²⁾

○「ことわざ」例に記載された観点のキーワード化³⁾

○読み取りに基づく教育理論仮説との接点とその可視化

Ⅳ 研究結果の概要

1. 「ことわざ」の用例と意味

ここでは、『大辞典』において構成されている項目欄に基づいて、12項目欄を抽出した。各欄における記載事例における「用例」と「意味」を

例示する。⁴⁾

(1) こ【子】欄

「こ【子】」欄においては、91 事例が掲載されている。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「子有れば万事足る」：地位や財産などなくとも、子どもさえいれば人間は十分に幸福である。（「子ども存在」の影響力・魔力）

(No.2)「子が思うより親は百倍に思う」：子が親を思うよりも、親が子を思う愛情の方がはるかに深い（「子ども存在」の影響力・魔力）

(No.12)「子とふぐりは荷にならぬ」：かわいいわが子と陰のうは、重荷のように見えても、少しも負担に感じない。（「子ども存在」の魔力）

(No.18)「子に甘いは親の常」：たとえどのように厳格な人でも、わが子だけには寛大すぎるのが普通である。親は、わが子には甘い。（「子ども存在」の魔力）

(No.21)「子に過ぎたる（勝る）宝なし」：子は人間の最上の宝である。どのような宝も子には及ばない。（「子ども存在」の価値）／（No.49）「子は第一の宝」／（No.50）「子は宝」／（No.54）「子ほどの宝なし」

(No.19)「子に黄金満えいを残すは一経に如かず」：子には財産を残すよりは、教育を施す方がよい。（わが子への教育）

(No.20)「子に教えざるは父の過ちなり、学の成らざるは子の罪なり」：子どもに父が教育しないのは父の過失であり、父が教えたにもかかわらず、子の学問が一人前にならないのは、子に非がある。（わが子への教育・子どもの自己責任）

(No.23)「子に使わるる身こそつらけれ」：人の親というものは子を育てるために苦勞して一生を終わるというつらい身である。（生涯続く子育ての苦勞）

(No.24)「子に引かざる後ろ髪」：子がかawaiiのために思いきって事がなせないさま。（子育ての迷い）／（No.25）「子に引かされるは親の因果」／（No.26）「子に引かるる親心」／（No.27）「子に迷う親心」

(No.29)「子の愛盛りには唾も物言う」：子どものかわいい盛りの頃には、どのように無口な親でも、つい言葉をかけたり、あやしたりするものである。（「子ども存在」の魔力）

(No.31)「子の命は親の命」：親にとってわが子の命は自分の命と引き換えても惜しくないほど大切なものである。（親子の絆）

(No.32)「子の可愛いと向こう脛の痛いは耐えられぬ」：子が可愛いという気持ちと向こう脛を打ったときの痛さは、こらえて表に出すまいとしてもつい出てしまう。（子を思う情けの痛切さ）

(No.33)「子の心親知らず」：親は子の本当の心を知ることができない。（親の思い込みによる子の成長理解の難しさ）

(No.37)「子の恥は親の恥」：子が恥ずかしい行ないをすれば、それはその子を育てた親の恥ともなる。子が辱めを受けることは、親にとっても不名誉なことである。（栄辱をともしする親子の関係）

(No.38)「子の悪いのと盆の窪みは見えぬ」：自分の盆の窪みが見えないのと同じように、親には自分の子の欠点や悪行は見えないものである。（身近であることの落とし穴）

(No.42)「子は生むも心までは生まれぬ」：子どもの体は親の生んだもので親に似るかもしれないが、その心まで親に似せることはできない。（わが子の教育の難しさ）

(No.43)「子は親に似る」：子というものは結局親の性質を受け継いでいるものだ。（似たもの同士の親子）

(No.41)「子は親を映す鏡」:子どものふるまいを見れば、どのような親か知ることができる。(環境としての親の存在)

(No.46)「子は鏡」:子どもは夫婦の間をつなぎとめる鏡のようなものである。「子ども存在」の魔力・家族をつなぐ絆 / (No.52)「子は夫婦の中の鏡」

(No.47)「子は子ごとに変わる」:同じ親の子でありながら、兄弟姉妹一人ひとり、みな性質が異なるものである。(子ども一人ひとりの個性・性格)

(No.48)「子は三界の首枷」:親にとって子どもは、いくつになっても、どこへ行っても首にかけた枷のように気にかかる厄介な存在である。(気がかりな存在)

(No.55)「子ほど喜ばしにくきもの無く、親ほど喜ばしやすきもの無し」:子は親の慈愛をさほどに感じないが、親は子のわずかの孝行にも喜ぶ。(親ならではの喜び)

(No.56)「子持てば親心」:子を持てはじめて、親としての情を知るようになる。(親としての情)

(No.58)「子故に捨つる親心」:親は子に対する慈愛の心から、わが身を犠牲にする。(子に対する犠牲心)

(No.60)「子故に迷う親心」:子を思う心のあまり、正常な判断力を欠いて迷うのも親心である。(揺れ動く迷いの親心) / (No.61)「子故の闇」

/ (No.69)「子を思う心の闇」

(No.63)「子を憐れまば杖を与え、子を憎く思わば食に飽かすべし」:子をかわいいと思うならばむち打ってきびしく育てよ、憎いと思うならば食べ物を欲しがらだけ与えてわがままに育てよ。(子のためにならぬ甘やかし)

(No.65)「子を生みゃ苦を生む」:子を持てば苦労が多い。(子を持つが故の苦労)

(No.66)「子を生むと飯炊き自慢は言われぬ」:い

くら料理が得意であっても、子どもができると育児に追われてそれどころではなくなる。(育児の忙しさ)

(No.70)「子を思う鶴」:子を大事に思う母の愛のたとえ。(子への母親の至上の愛)

(No.71)「子を思うは親の常」:子どものことを気づかい心配するのは、親として当然の思いである。(当然の親心)

(No.74)「子を知らんとせばその親を見よ」:親を見ればその子がどういう子で、将来どのような人間に育つかがわかる。(親の感化力)

(No.75)「子を知ること父に若しくは莫し」(「子を知ること父にしかす」):子の性質や長所、短所などは、他のだれよりも父親が一番よく知っている。(父親の教育眼識) / (No.76)「子を知るものは親」 / (No.82)「子を見ること親に如かず」

(No.86)「子を持って知る親の恩」:自分自身が親となってはじめて、親がいかに苦労して自分を育ててくれたかを知る。(親への恩) / (No.79)「子を育てて知る親の恩」 / (No.91)「子を養いて方に父の慈を知る」

(No.83)「子を見れば親がわかる」:子を見れば、親の性格や教養のほどが判断できる。(親の生き写しとしての子)

(No.87)「子を持って泣かぬ親は無い」:親というものはすべて、このために苦労するものだ。(親の犠牲的苦労) / (No.88)「子を持てば七十五度泣く」

(No.89)「子を養いて老いを防ぐ」:自分の子をそばに置いて、その子の世話をしていれば、親は気も張り、年をとらない。(親の元気の源になる子育て)

(2) こだから【子宝】欄

「こだから【子宝】」欄においては、2事例が掲

載されている。「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「子宝脛が細る」：子は宝ではあるが、育てるのに親は苦勞する。(子育ての至宝と苦勞)

(No.2)「子宝千両」：子はたいへんな宝である。(至宝としての子)

(3) こども【子供】欄

「こども【子供】」欄においては、75 事例が掲載されている。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.16)「子供が火なぶりすると寝小便をする」：子供のいたずらを戒めていう。(いたずら盛りの子ども)

(No.19)「子供が物言うと火が危ない」：ことばを話すようになった子どもは、活発に動きまわるので、火もとに注意しなければならない。(いたずら盛りの子ども)

(No.21)「子供が炬をかき回すと天の邪鬼が出る」：子どもが火を扱うことを戒めていう。(いたずら盛りの子ども)

(No.22)「子供川端火の用心」：子どもが川へ落ちないように、火事を起こさないように注意を払わなければいけない。(いたずら盛りの子ども)

(No.25)「子供でも数の内」：子供でも多く集まればその勢いはあなどりがたい。(子どもの底力)／「餓鬼も人数」

(No.26)「子供と芋種は隠されぬ」：種芋が必ず同じ種類の芋に生長するように、子どもが親に似るのは隠しようがない。血統の争えないことのたとえ。(親子の血筋)／「物種は盗まれず」

(No.27)「子供と小鰐腹の割れるを知らぬ」：子どもと鰐の子は大量にいくらでも食べる。(子どもの食欲)／(No.67)「子供は小びんの毛の抜ける程食いたがる」：子どもは頭の左右の毛が抜けてしまうほど食いたがる。(食欲旺盛な子ども)

(No.29)「子供と雪隠虫はつけ上がる」：便所のうじ虫は放っておくと肥壺からどんどん這い上がってくるように、子どもも甘やかしていればすぐにつけ上がる。(子どもへの甘やかしの禁物)

(No.30)「子供と馬鹿は本当のことを言う」：子どもと馬鹿は、邪心が無く正直に本当のことを言う。(子どもの無邪気さ)／(No.68)「子供は正直」：子どもは無邪気で飾り気がなく、とりつくりったり、隠したりすることができない。(子どもの無邪気さ)／(No.71)「子供は七つまでは神様だ」：七つぐらいまでの子どもは、世間が大切に扱ってくれる。子どもの無邪気で純粋なことをいう。(子どもの無邪気さ・純粋さ)／「七つ前は神の子」

(No.31)「子供と仏は無欲なもの」：子どもには、仏と同じように現世的な利欲はない。(無欲な子ども)

(No.36)「子供に神が付く」：子どもは神様が守ってくれる。(守られる子ども)

(No.37)「子供に飢饉無し」：子どもというものは働く力がなくても、親やおとなの世話で、なんとか育ってゆくものである。(まわりの人からの守り)

(No.38)「子供に銭を持たすは剃刀を持たす如し」：子どもに自由に金を使わせるのは危険であるというたとえ。(子どもへの自由の限度)

(No.40)「子供に花」：なにもわからない者に、美しい物やねうちのある物を与えても意味がないことのたとえ。(ねうちを理解しない子ども)／「猫に小判」

(No.47)「子供の喧嘩に親が出る」：子どもどうしの喧嘩に親が出てきて口を出すのを牽制し、からかっていう。(口出しをしない子どもの喧嘩)／(No.48)「子供の喧嘩に親が出る人立ち中立ちお医者立ち」：子どもの喧嘩に親が出ると、事が

大きくなってしまふこと。／(No.49)「子供の事に親が出る」

(No.50)「子供の使い」:子どもがするような、要領を得ない使い。(役に立たず、要領を得ない子ども)

(No.53)「子供の泣きべそ、年寄りの死にべそ」:子はよく泣くものであるし、老人は口ぐせのように死ぬ死ぬと言うものである。(泣くことは子どもの仕事)

(No.54)「子供の根問い」:子どもは根ほり葉ほり、何にでも疑問を発するものである。(好奇心旺盛な子ども期)

(No.63)「子供は教え殺せ」:子どもは徹底的に教育せよ。(鍛えて教えて育つ子ども)

(No.64)「子供は大人の父である」:子どもを見れば、将来どんな人物になるか見当がつく。人格の形成は幼少期に形成され、大人になっても変わらない。(人格形成の基礎となる子ども期)

(No.65)「子供は風の子」:子どもは元気で、寒風の中でも平気で遊びまわるものである。(戸外環境にふれて育つ子ども／外遊びの奨励)／

(No.66)「子供は風の子、大人は火の子」

(No.69)「子供は泣き育つ」:子どもの泣くのは当然のことで気にする必要はない。子どもの泣くのは少しも心配するな。(子どもは泣くことが仕事)／(No.70)「子供は泣くのが商売」

(No.71)「子供は貧乏人の宝」:未来の大きな可能性を秘めた子どもたちは、貧乏人にとって一番の宝である。(子どもの可能性)／「子に勝る宝なし」

(No.74)「子供も猫よりまし」:子どもも時には役に立ち、食べるだけでも何もしない猫よりましである。(子どもなりの有用性)

(4) じ【児】欄

「じ【児】」欄においては、2事例が掲載されて

いる。「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「児は母の醜きを嫌わず」:子の母親に対する愛情は美醜を超越した深いものである。(偏見なき母親への思い)

(No.2)「児を憐れんで醜きを覚えず」:自分の子どもはかわいいのでどのような欠点も目につかない。(子どもへの盲目的愛情)

(5) じぎ【児戯】

「じぎ【児戯】」欄においては、1事例のみが掲載されている。「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「児戯に等しい」:子どもの戯れと同じで、何の価値もない。あさはかでとるにたらないこと。(とるにたらない子どもの戯れ)

(6) すえっこ【末っ子】欄

「すえっこ【末っ子】」欄においては、2事例が掲載されている。「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「末っ子のきまま」:末っ子は甘やかされて育つからわがまま勝手なものだ。(末っ子のわがまま)

(No.2)「末っ子は猫のしっぽ」:家を継ぐこともない末っ子は、猫のしっぽのように何の役にも立たない。(役立たずの末っ子)

(7) すてご【捨て子】欄

「すてご【捨て子】」欄においては、2事例が掲載されている。「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「捨て子は世に出る」:捨てられた子どもは出世する。見捨てられたような境遇のものは、たくましく育って、かえって世に出るものである。(たくましく育つ)／「捨て子の立身」

(No.2)「捨て子も村のはごくみ」：村に捨て子があれば、全村で育ててくれる。見捨てられても誰かがなんとかしてくれる。(地域での子どもの育み)

(8) なく【泣く・鳴く】欄

「なく【泣く・鳴く】」欄においては、47 事例が記載されている。子どもの姿に関する象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「泣いた烏がもう笑う」：今まで泣いていた者が、すぐあと、きげんを直して笑っている。子どもの喜怒哀楽の感情の変わりやすいことのたとえ。(子ども喜怒哀楽の変わりやすさ)／「今鳴いた烏が天上を通る烏」／「今泣いた烏がもう笑う」

(No.2)「泣いて勝は子供の癖」：言うことが叶えられないとなると、最後は泣きわめいて我を通そうとするのが子どものいつもの手だ。(子どもの常套手段としての泣きわめき)

(No.13)「泣かぬ子は無口」：泣かない子は、成長しても無口な人間になる。(泣く・泣かないことの後の成長)

(No.22)「泣く子と地頭には勝たれぬ(勝てぬ)」：道理の通じない子どもや権力者とは、争ってもどうにもならない。(手に負えない泣く子)／

(No.24)「泣く子には千人の武者も叶わず」

(No.23)「泣く子に乳」：どんなに泣いている子どもでも乳をやればすぐに泣き止む。(効果観面の授乳)／(No.25)「泣く子に羊羹(飴)」／(No.26)「泣く子の口へは地黄煎玉」

(No.27)「泣く子の独り黙り」：泣く子はあやすよりも、独りにしてうっちゃっておけば自然に泣き止むものだ。(子どもを静めるコツ)

(No.28)「泣く子は頭堅し」：大声で泣く幼児は元気で健康である。(元気・健康の証としての泣き)／(No.29)「泣く子は育つ」：赤ん坊が泣くと親

は心配になるが、むしろ元気に泣く子の方が丈夫に育つ。

(No.33)「泣く子も鍋の蓋を見る」：泣きわめきながらも食べ物に注意を怠らない。(子どもの食い気)

(No.34)「泣く子も目を開く」：駄々をこねて泣きわめく子も時々目は開けて相手の様子をうかがい、周囲の状況を見ている。(状況をみてふるまう子ども)

(9) ななつ【七つ】欄

「ななつ【七つ】」欄においては、16 事例が記載されている。子どもの存在の受け止めに関する象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.9)「七つ七里に憎まれる」：数えどし七歳の頃の男の子はいたずら盛りで、近隣近村から憎まれものとなる。(憎まれる子ども期)

(No.10)「七つの倉より子は宝」：いくつもある倉の財宝よりも子どもの方がもっとすばらしい宝である。(子どもの値打ち)

(No.13)「七つ前(迄)は神の子」：数えどし七歳未満の子どもは神に属する存在で、わがままや非礼も咎められない。(アジュール存在としての子ども)

(No.15)「七つ八つは近所の嫁を追い出す」：数えどし七、八歳頃の子どものは何かにつけいたずら盛りで、そのため隣近所の嫁が出ていくといったような迷惑をかける。(いたずら盛りの子どもの期)／(No.16)「七つ、八つは憎まれ盛り」

(10) にくまれご【憎まれ子】欄

「にくまれご【憎まれ子】」欄においては、5 事例が記載されている。いずれも子どもの姿に関する「ことわざ」であり、次のようになる。

(No.1)「憎まれ子頭堅し」：人から憎み嫌われる

ような腕白小僧は概して丈夫である。(たくましい子ども)

(No.2)「憎まれ子国にはびこる (はだかる)」:人から憎まれるような子は、世間に出ると幅をきかし、威勢をふるうものだ。(憎まれっ子の世渡り上手) / (No.5)「憎まれ子世にはばかり (はびこる・出す)」

(No.3)「憎まれ子の端菜 (端米)」:人から嫌われる子は食事のときでものけものにされる。(いろいろな場面でものけものにされる憎まれっ子) / (No.4)「憎まれ子のはなさべ」

(11) ねる【寝る】欄

「ねる【寝る】」欄においては、41 事例が記載されている。子どもの育ちに関する象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.25)「寝る子は息災」:よく眠る子は丈夫に育つ。(育つ基盤としての睡眠) / (No.26)「寝る子は育つ」 / (No.27)「寝る子は達者」

(12) おさなご【幼子・稚子】欄

「おさなご【幼子・稚子】」欄においては、2 事例が記載されている。「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

(No.1)「幼子の顔は七回変る」:幼児の容姿は変りやすい。(めまぐるしい成長の変化)

(No.2)「幼子は白き糸の如し」:幼い子供の躰が大切であることのたとえ。(子ども期の躰の大切さ)

2. 子ども存在・概念の俯瞰

ここでは、例示した (1) から (12) の「ことわざ」欄においてプロットした、観点のキーワードから、「子ども存在・概念」の全体像を把握することとする。⁵⁾

(1) こ【子】欄

<キーワード>

(「子ども存在」の影響力・魔力)
 (「子ども存在」の魔力)
 (「子ども存在」の価値)
 (わが子への教育)
 (わが子への教育・子どもの自己責任)
 (生涯続く子育ての苦労)
 (子育ての迷い)
 (親子の絆)
 (親の子を思う情けの痛切さ)
 (親の思い込みによる子の成長理解の難しさ)
 (栄辱をとにもする親子の関係)
 (身近であることの落とし穴)
 (わが子の教育の難しさ)
 (似たもの同士の親子)
 (環境としての親の存在)
 (「子ども存在」の魔力・家族をつなぐ絆)
 (子ども一人ひとりの個性・性格)
 (気がかりな存在)
 (親ならではの喜び)
 (親としての情)
 (子に対する犠牲心)
 (揺れ動く迷いの親心)
 (子のためにならぬ甘やかし)
 (子を持つが故の苦労)
 (育児の忙しさ)
 (子への母親の至上の愛)
 (当然の親心)
 (親の感化力)
 (父親の教育眼識)
 (親への恩)
 (親の生き写しとしての子)
 (親の犠牲的苦労)
 (親の元気の源になる子育て)

<子ども像の諸相>

「子どもの存在・概念」を俯瞰することのできるキーワードを析出することができた。次のような、特色の傾向が把握できる。

第一には、子どもには「影響力・魔力・価値」が潜在していることである。子どもをとりまくまわりの人たちが、思わずに魅了されてしまう「子どもパワー」である。「子どもにふれる」ことによって、親や大人たちが、一瞬にして感化されてしまう姿が、「ことわざ」に組み込まれ、象徴化されている。これらは、子どもの不思議な底力である。

第二には、「わが子育ての難しさ」を象徴するものである。子育てには、「苦労」「迷い」「忙しさ・慌しさ」「成長理解の難しさ」「見落とし」などが、「ことわざ」にそれとなくの表現でもって映し出されている。

第三には、親子の情愛・関係を、それとなく納得させる象徴化である。「親への思慕」「親心」「喜び」「情け」「わが子への感化力」「犠牲心」などが、親子の間で揺れ動く姿として、「ことわざ」に込められている。

(2) こだから【子宝】欄

<キーワード>

(子育ての至宝と苦労)

(至宝としての子)

<子ども像の諸相>

【子宝】の欄であるがゆえに、「子どもの存在」を高く評価するものとして、「ことわざ」の中に象徴化している。とりわけわが国における「子宝思想」を背景にした受け止めであろうか。

(3) こども【子供】欄

<キーワード>

(いたずら盛りの子ども)

(子どもの底力)

(親子の血筋)

(子どもの食欲)

(食欲旺盛な子ども)

(子どもへの甘やかしの禁物)

(子どもの無邪気さ)

(子どもの無邪気さ・純粋さ)

(無欲な子供)

(守られる子供)

(まわりの人からの守り)

(子どもへの自由の限度)

(ねうちを理解しない子ども)

(口出しをしない子どもの喧嘩)

(役に立たず、要領を得ない子ども)

(泣くことは子どもの仕事)

(好奇心旺な子ども期)

(鍛えて教えて育つ子ども)

(人格形成の基礎となる子ども期)

(戸外の環境にふれて育つ子ども)

(外遊びの奨励)

(子どもの可能性)

(子どもなりの有用性)

<子ども像の諸相>

子ども期の現実的な姿の諸相が、「ことわざ」には感じ取れる。

第一には、子どもの成長に向けた、良くも悪くも育ち盛りの姿を、直視していることである。子どもに固有な行状である「いたずら」「食欲」「好奇心」「泣く」などは、子育ての立場にある親からは、厄介な姿としての感じ取りもある。

第二には、子どもを「賛美」するものである。子どもの「純粋さ」「無邪気さ」「無欲さ」「可能性」「有用性」「底力」などが象徴化されている。

第三には、子どもの成長には、少なからず子どもへの圧力を必要とするものである。「ねうちを理解しない」「要領を得ない」「役立たず」であるがゆえに、「甘やかしの禁物」「自由の限度」

「鍛え、教える」など、奔放なる子育てへの警鐘が、「ことわざ」には込められている。

第四には、子どもに向けるアンビバレントな眼差しをふまえて、子どもの成長へのメッセージが、「ことわざ」には、込められている。「人間形成の基礎となる子ども期」「戸外環境にふれて育つ」「外遊びの奨励」「可能性」「有用性」などに象徴化されている。

(4) じ【児】欄

<キーワード>

(偏見なき母親への思い)

(子どもへの盲目的愛情)

(子どもへの自由の限度)

<子ども像の諸相>

少ない事例の中にも、子どもに対する二つのふるまいが示されている。一つは、親あるいは母親のわが子への愛情である。「偏見なき思い」「盲目的愛情」などは、子どもを丸ごと受け止める姿である。そうした姿勢に、多少の警鐘なり、用心が必要であることを投げかけていると思われる。二つは、それであるがゆえに、子どもにはなにがしかの制限が求められることの必要を漂わせている。

(5) じぎ【児戯】

<キーワード>

(とるにたらない子どもの戯れ)

<子ども像の諸相>

子どもの行状に対しての、やや否定的な評価を下している。「とるにたらない」に象徴化されている。

(6) すえっこ【末っ子】欄

<キーワード>

(末っ子のわがまま)

(役立たずの末っ子)

<子ども像の諸相>

きょうだい関係にあって、「末っ子」の評価は芳しくない。子育て習俗の文化的文脈にあって、長子に期待が置かれていたことによる、「ことわざ」の響きなのであろうか。

(7) すてご【捨て子】欄

<キーワード>

(たくましく育つ)

(地域での子どもの育み)

<子ども像の諸相>

福祉的観点が内包されている「ことわざ」である。社会や地域が「子どもを見捨てない」とするメッセージでもある。わが国における地域共同体的風土から醸し出された「ことわざ」として受け止めることができる。

(8) なく【泣く・鳴く】欄

<キーワード>

(子ども喜怒哀楽の变りやすさ)

(子どもの常套手段としての泣きわめき)

(泣く・泣かないことの後の成長)

(手に負えない泣く子)

(効果観面の授乳)

(子どもを静めるコツ)

(元気・健康の証としての泣き)

(子どもの食い気)

(状況をみてふるまう子ども)

<子ども像の諸相>

「泣く」ことは、子どもにはつきものである。「子どもの喜怒哀楽の变りやすさ」は、子ども期ならではことであるとすれば、「泣く」ことは子どもの日常の姿である。「ことわざ」には、さりげなくアンビバレントな意味世界を内包させており、「泣く」ことにおいても同様である。

「泣く」ことは、子どもの巧妙なるその場をしのごタクトである。「状況を見て泣き、ふるまう」「泣きながらも食い気がある」「泣きわめき」などは、日常的に観察されるところである。

親としても、子どもの「泣き」に対する巧妙なタクトを振るうこともある。乳児の場合は「授乳」が効果観面として言い表されている。

「泣く」ことの成長への積極的な意味も、「ことわざ」には散見される。「元気・健康の証」に示されるように、成長の姿そのものである。

(9) ななつ【七つ】欄

<キーワード>

(憎まれる子ども期)

(子どもの値打ち)

(アジール存在としての子ども)

(いたずら盛りの子ども期)

<子ども像の諸相>

七歳は、人生の大きな区切りとして、古来より受け止められてきた。「男女七歳にして席を同じうせず」は、人口に膾炙した「ことわざ」である。七歳までの子ども期の姿には、七歳以降の人に求められる倫理性、道徳性、社会性が必ずしも強調されない。ある意味では、天真爛漫なる姿が、「子どもらしい姿」として暗黙の了解なり理解であったようである。

この欄に析出されたキーワードに示される子どもの姿は、七歳以降の人に求められる人格的資質とは距離をおくものではあるものの、完全否定の響きは、「ことわざ」にはない。「子ども期」のさまざまな容認、黙認していく社会風土から、滲み出された「ことわざ」である。

(10) にくまれご【憎まれ子】欄

<キーワード>

(たくましい子ども)

(憎まれっ子の世渡り上手)

(いろいろな場面でものけものにされる憎まれっ子)

<子ども像の諸相>

この欄は、(9)の「ななつ【七つ】欄」と連動し、「にくまれご【憎まれ子】」(憎まれっ子)に特化したものである。子どもの姿を、「憎まれる」対象としながらも、「たくましい」「要領のよさ」などとして、「ことわざ」には「憎まれっ子」を好印象として受け止めた意味世界が包含されている。

(11) ねる【寝る】欄

<キーワード>

(育つ基盤としての睡眠)

<子ども像の諸相>

子どもが「寝る」ことに関しては、肯定的な評価として受け止められている。子どもをとりまく人たちの寛容的な姿勢から出てきた「ことわざ」である。

(12) おさなご【幼子・稚子】欄

<キーワード>

(めまぐるしい成長の変化)

(子ども期の躰の大切さ)

<子ども像の諸相>

「子ども」の別の言い回し表現の項目欄である。この欄においては、「おさなご【幼子・稚子】」を、その現実として肯定的に位置づけている。「変化に富む成長の時期」であるがゆえに、幼い時にこそその「躰の厳しさ」を強調している。

3. 潜在する教育視座

「子どもの存在・概念」をめぐる「ことわざ」を、(1)から(12)の欄にわたって、子ども像を象徴化することを試みた。各欄において、素

描した「子ども像の諸相」をてがかりにして、「ことわざ」に潜在している教育視座を把握することとする。「子ども期の特色」をふまえた多面的な教育視座である。今日的な教育視座の概念で受け止めると、次のような教育視座を列記できる。

- 子ども期の尊さ
- 育みのまなざし
- 子どもの不思議と魅力と感化力
- 子ども期に培う基礎・基本
- 生涯発達への見通し
- 子ども期の発達特性
- 子ども期の親子関係構築
- 生涯にわたる人格・人間形成
- 子どもを地域社会で育てる
- 子どもを見守る
- 教え、養って育つ子ども
- 子ども理解

V おわりに

「子どもの存在・概念」をおしなべて把握すると、「子煩悩的な子ども像」が、「ことわざ」には浮遊している。子どもの「無邪気さ」「無欲」「純粹さ」などの「真綿」でもある概念でもって「子ども」を包み込む図式が想定される。この「真綿モデル」は、近代ヒューマンイズムの教育思想の展開の流れの中で、主流の勢いであり、換言すれば有無を言わず無条件に導入され、子ども像の輪郭が形成された。「子供の誕生」(アリエス)をはじめ、多くの幼児期の教育・保育に関心を寄せる思想や実践の論客によっても揺るぎ無い「子ども像・概念」が醸成された。英国の「プラウデン報告」における初等教育(幼児期の教育・保育を含む)における「子ども仮説」

には、まさに「無邪気さ」「誠実さ」などの概念が位置づけられている。そこに「遊びを通しての教育・保育」が路線として敷かれた。

本稿で取り上げた「子どもの存在・概念」をめぐる「ことわざ」のそれぞれは、その時代や背景の違いがあり、意味世界も異なるところがあつつも、概して厳しい眼差しを向ける「ことわざ」の全てではない。ある意味では、穏やかな、温かな包み込みや微笑みが、「ことわざ」の核心や周辺に見え隠れしている。

「ことわざ」と「教育理論仮説」は異なる文脈で、その視座が流布している。これら二つの流れは、偶然にしても必然的に接点を持ち、交わる場所もある。「ことわざ」は、きわめて人類的感覚的なとらえ方ではあるとしても、人間生活に根ざした、時代を超えた、ぶれない視座を提供している。「教育理論仮説」を見据えた、超えた、教育視座を潜在させていると考えるものである。極論すれば、「ことわざ」の後付として、教育科学としての「教育視座」が示されているのかも知れない。

注および引用文献の記載

- 1) 北村孝一・監修 『故事俗信ことわざ大辞典』(第2版) 小学館 2012年
- 2) 抽出項目は、論文の副題として示している、「子どもの存在・概念」を把握する手がかりとなる、「項目欄」を限定した。「ことわざ」の表記については、部分的に平易な表記に変換した。
- 3) 「子ども存在・概念」を象徴的に表現すると受け止められるキーワードの表記とした。
- 4) 記載用例の頭出しに示している(No. 番号)は、各欄における記載順の番号である。記載番号の登録は、田中が行なったものである。
- 5) 各欄のキーワードは、重複するものもある。同一のキーワードの場合は、一つのみのキーワードの登録とした。